

百怪—犬猫の怪 1 1 話—

annmin

「錯覚」

聞いた話。

ある30代のサラリーマンが仕事から自宅のあるアパートへ帰ってくると、部屋のソファで見知らぬ女性が子供を抱えるようにして寝ていた。

女性は彼に気付くと

「ねえ、アメ買ってきて。この子が欲しがっているから」

と当たり前のように話しかけてきた。

部屋を出て、番号を確認すると確かに自宅である。

自分は独身だし、親戚の誰かが来るという話も聞いていない。

そもそも、鍵は掛けてきたしスペアキーを誰かに預けた覚えもない。

彼は言われるがままに近所のコンビニで百円相当の安いアメを購入すると、再び自宅へと戻った。

部屋に入ると、あの女性と子供の姿はなく、入れ替わりのように飼っていた猫が二匹、ソファの上で寝息を立てていた。

オスとメスで、どちらも元野良猫。

ただ、メスの方が先輩猫で、オスより4歳ほど年上であったという。

彼は何気無く買ったアメをその先輩猫の寝顔に近付けると、

ビクッと飛び跳ねるように起きた。

そしてアメに鼻を近づけフンフンと

鳴らすと、ソファを飛び降りて

エサのある台所へ行き、催促を始めた。

もう10年ほど前の話で、その先輩猫も死んでしまったが、そんな事があったのはその一度きりだったという。

「タブー」

念願の一戸建てをローンを組んで購入した、
その奥さんの話。

家を建ててまず真っ先にした事は、ペットを
飼う事だった。

子供の頃から実家が猫を飼っていた彼女は、
さっそく以前から話しを通していた友人より
二匹の子猫を譲り受けた。

その友人の家で飼っていた猫が産んだ
子供で、両方ともメス。

家に来た姉妹猫は家族からとても
可愛がられた。

3年もすると、二匹とも立派に成長し、
一匹は豊満というか全体的にバランス良く
成長したが、もう一匹はお腹に肉が集中し、
「太ましい」「タヌ子」と呼ばれるようになっ
た。

ある時、その姉妹猫が食後の毛づくろいを
しているのを何気なく見ていたが、ふと
横になっていた「タヌ子」のお腹を、
何を思ったのか、もう一匹が片方の前足で
「ぶに」と押した。

「何するのよっ！！！」

大声と共に「タヌ子」は、前足で
引っぱたくように思い切り猫パンチを
その姉妹猫に食らわせた。

聞こえた声は若い女性のそれで、部屋には
人間の女性は彼女しかいなかったのだが、
はっきりと自分以外のその声を聞いたと
いう。

「まあ、それは怒るでしょ、

と思ったけど……

あんな声まで出して、

相当気にしていたのね」

声を聞いたのはその一度きりだったと
いうが、未だにその二匹は健在だそうだ。

「因果」

一人暮らしを始めてもう10年になる
知人の話。

彼の実家は猫を飼っていた。

というより、ペットは猫しかいなかった。
それは彼の生まれる前から、家を出るまで
変わらなかったという。

しかし、一人暮らしは当然アパートか
マンションになる。

ペットはたいてい飼う事は出来ない。
犬猫クラスになると、ごまかす事も
不可能だ。

「でもねえ、不思議と家には何か
いたんですよ」

ある時、道路脇の茂みに引き出しが
捨てられていた事があった。

木製のそれは、ヒマワリの種が大量に
入っていて、妙に目を引いたという。
何かと思って近付くと、動くものが見えた。

「ハムスターでした」

それは後で調べるとキンクマといわれる
種類だとわかった。

茂みの中にもう一匹いて、計2匹を結局
家に連れて帰った。

「引越しか何かの時に一緒に捨てたん
でしょうけどね」

そのハムスターは2年ほどで他界して
しまったが、それから1年と経たずに
今度は巣から落ちたムクドリを保護し、
飼う事になった。

「その後はハトのヒナとか、小動物を拾う
機会がありましたね」

都内では、基本的に野鳥は捕まえる事は
禁止されているらしい。

しかし保護する分には構わないようで、
動物病院では治療費などは無料になった
という。

ある時、ふと今まで拾ったペットの事を
考えてみた。

ネズミ、小鳥、ヒナ……

彼には心当たりがあった。

「今まで、家の猫が捕まえた獲物？」

聞くと、彼はコクリとうなづいた。

それから少し困った顔をして、

「コウモリを捕まえてきた時もあったん

ですけど、どうしましょうか？

僕、コウモリの飼い方なんて知らないん

ですけど」

その時はその時で、と答えると、今までに購入したオリやエサ箱があるから、何とかなるかなあ、と彼は頭をかいていた。

「接待」

親戚の人から聞いた話。

その人の知り合いが仕事の都合で上京し、都内に移り住む事になった。

その時、引越しの手続きが済むまでの間、家にその家族を泊める事にしたという。

その家族が初めて泊まりに来た日。

仕事で深夜に帰宅した彼は、その家族がすでに寝ているだろう部屋を静かに通り過ぎ、自室へと向かった。

その途中、何やらにぎやかな音がする。

それはどうも、子供の部屋から聞こえてくるようだった。

「その時は子供はみんな独立していたし。

何だろう、と思っただけなんだ」

すると、TVゲームで遊んでいる人影が目に入った。

2人いて、1人は髪の長い20才そこそこの女性、もう一人は12、3才くらいの女の子に見えたという。

「知り合いの子かな」

まあ好きにさせてやろうと、彼はそのまま自室に戻り、眠った。

朝起きて知り合いと一緒に朝食を食べている時に、彼は気付いた。

「知り合いの子に、女の子はいなかったんだよね……」

そもそも、男の子の兄弟で、2人ともまだ小学生だったし」

彼は家族にはその事を話さないで、密かに子供部屋へ向かった。

見ると、昨夜見たTVゲームは残されており、そのそばで猫が2匹、寄り添って眠っている。

1匹はメスで、今年3才になる自分の家の飼い猫である。

しかし、もう1匹の、一回り小さな黒猫に心当たりはない。

すると、知り合いの奥さんが入ってきて言った。

「あ、コタローちゃんここにいたの」
聞くと、すでに去勢してあるので、オス
だけドメスと一緒にいても問題は無いと
説明された。

まだ1才にも満たないらしい。

「室内飼이었다し。自分より小さい子が
来たので、接待でもしていたのかねえ」
ちなみに、その時に遊んでいたのは、
某格闘ゲームだったそう。

「電車」

とある会社員の方から聞いた話。

彼の会社の最寄駅は階段が長く、さらに使用している方面出入口はエスカレーターが設置されていなかった。

「帰りは下りだから楽ですけど」

ある日、彼が帰宅しようと駅の階段を降りていくと、自分の足元の視界に駆け下りる影が入った。

「え？」

あまりの速さに正確な姿は確認出来なかったが、それは黒猫のように見えた。

急スピードで階段を駆け下りると、ちょうど駅に停車して開いていた電車のドアの中へと消えてしまった。

当然だが電車はドアを閉じ、そのまま次の駅へ発車した。

「変な猫もいるもんだなあ、その時は

そうとしか思わなかったんですけど」

数分後、隣の駅で電車が止まったとのアナウンスが入った。

「線路に人が入ったとの情報で……」

その日の帰りは1時間ほど遅れたという。

「ガラス戸」

下町、と呼ばれるところに住んでいる
お婆さんから聞いた話。

今年で80歳になるという。

「この前、縁側でお茶を飲んでたらね」

家の中では夫がTVを見ている。

ブロック塀、その下の小さな庭をボーッと
見ていると不意にTVの音量が上がった。

「でね、音を小さくしてって言おうと

振り返ったんだけど」

ふと、半分ほど開いた引き戸のガラス部分に
何かが写っているのが目に入った。

子供が2人。

それも、昔風の格好の。

対照的な白い着物と赤い着物を着たその
2人は、ブロック塀の上に立ってふざけ
合っている。

「あんたたちっ！！」

注意しようと大声を上げながら振り向くと、
そこに子供はいない。

代わりに、子猫が2匹、お婆さんの方を
ジッと見つめていた。

「黒いのと茶トラのコだったけど。

毛の色に関係無く、好きな着物を

着れるのかしらねえ」

その後、すぐに姿を消してしまっただが、
今でも時々庭に現れるらしい。

しかし、そんな姿を見たのはその一度きり
だったという。

「天井」

警備会社に勤める親戚の青年は、自宅で犬を飼っていた。

「一人暮らし向けのワンルームマンションで本当はいけないんですけどね……」
ミニチュアダックスフントと呼ばれる種で、活発だが吠える事はなく、自分のいない時は非常に大人しくしているようだった。

「散歩にも連れて行けないから、自分がいる間は出来る限り遊んでやってね」

ある日、遊んでやっていると遊び疲れたのかそのままコロン、と横になり寝てしまった。起こすのは可哀想だと思い、彼は買い物へ出かけるためそっと家を出た。

外から帰ってくると犬はまだ寝ていた。仰向けになって、手足をパタパタと動かしている。

夢の中でも走っているのかな、と微笑ましく思っていると、犬が目を覚ました。

彼に気付くと、トコトコと歩み寄り顔をペロペロと舐めてくる。

その舌から逃れようと顔の向きを思わず変えた時、視線に天井が入った。

「え？」

一直線に動物の足跡が付いていた。サイズからすると小型のようだが……
それから、天井を掃除するのが大変だったと彼は語った。

その事があって以来、何度か同じように足跡が付く事があったらしい。

「そのコの足跡？」

と私が聞くと、
「わかりませんが、一度“天井を走るのは止めてくれ”って頼んだら、それからもう足跡が付く事は無くなりました」

そう言って、彼は目尻を曲げた。

「姉」

知り合いの寺の住職の話。

座禅を組んでいると、パタパタパタと廊下を走る音がする。

ちょうど夏休みで親戚が集まっており、その中の子供たちの1人だろうと思って、注意をしようと振り返った。

2、3才くらいの男の子がちょうど廊下を走っていくのが見えた。

“こらこら、止めなさい”と口を開きかけたところ、14、5才の少女が後を追いかけてきて、子供を抱き上げた。

どうやら、その子の姉らしい。

「どうもすみません、

目を離すとすぐにどこか行っちゃって」

「いやいや、このくらいの年頃の子は皆そうだから」

そう応えると、ペコペコと頭を下げて、少女は奥の部屋へと下がっていった。

やがて座禅を終えると、彼も法事のために親戚の集まる部屋へと向かった。

「おや？」

部屋に入って見渡すと、あの男の子の姿が見えない。

またどこかへ行ってしまっていてケガでもされたら—

行方を親戚に問うと、総出で寺の中を搜索する事になった。

もしや外に出てはいないかとぐるりと寺の周りを一周すると、縁側に立つ男の子を見つけた。

外側へ両手を伸ばしながら、後一步踏み出せば落ちそうに—

「危ない！」

慌ててその場へ駆け出す。

しかしよく見ると、子供の体は落ちそうで落ちない。

近付くと、その子の後ろで着ている服の裾をくわえて、必死になって

ふんばっている犬の姿があった。

「あ、この犬は……なんとまあ」
その犬はゴールデンレトリバーといわれる種で、ある親戚が毎年、お寺に来る時は知人に預けていたのだが、今年はどうしても都合が付かず、連れてくるという話を予め聞いていた。室内飼いだし、性格も大人しいメスだということで、寺に上げるのを含めてOKしていたという。

彼が子供を抱きかかえて部屋への道に戻ると、その犬も心配そうに後についてくる。子供が見つかった事を告げると、親戚一同、胸をなでおろした。

しかし、引っかかるものがあった。部屋を見渡すと、その子の姉と思われる少女の姿が見えない。

まだ探し回っているのかも、と聞くと、姉はいないし、そんな年頃の女の子は今日は来ていないという。

彼も思い出してみると、その少女の顔に見覚えが無かった。

いくら何でも、子供の頃から知っていれば忘れるはずはない。

新顔といえばその犬くらいのものだったが—

今年で5才になるというそのゴールデンに目をやると、男の子に抱きつかれるようにして、その顔をペロペロと舐めていた。

「先回り」

地元の会社に勤めているというOLの方から聞いた話。

「元々、上京して都市部の会社に勤めていたんですけど」

入社して2年目、いきなりの異動命令が下った。

それが彼女の場合は地元で、“こういう事もあるのかなあ”と思ったという。

「都会の便利さに慣れたのもあって、正直嬉しさと寂しさが両方ありましたけど」とはいえ、やはり地元に戻れるのは嬉しい。しばらくは実家から通うから、と伝えると両親は喜んで迎えてくれた。

その年の6月、お正月で里帰りしてから半年ぶりで、彼女は最寄の駅に降り立った。予め荷物は郵送してあり、文字通り身一つの帰郷である。

と、駅のホームから白い物が見えた。

「ありゃ、チコ。迎えに来てくれたの」それは彼女の実家で飼っていた、柴犬の雑種のメスだった。

白い毛並みのしっぽをブンブン振り回して、彼女がホームから出てくるのを待っている。

「実は、いきなり帰って両親を驚かそうと、連絡はしてなかったんですよ。

その時は“動物のカンなんだろうなあ、スゴいなあ”って思って」

彼女も嬉しさのあまりホームを飛び出すと、そこにチコはいなかった。

あれ？　と見回すと、5メートルほど先の曲がり角でこちらを見ている。

足を進めると、その角へさっと消えた。

それは、よくチコが散歩の最後に取り行動で、よく困らされたものだった。

「こいつめ～とか思って追いかけて。

でも、角を曲がるとまた先の方にいるんですよ。

面白くなっちゃって、それで家まで走らされちゃって……」

家に着くと、父親は仕事で留守だったが驚いた母親が出てきた。

“ちゃんと連絡しなさい！”と怒られた後、いそいそと母が料理を作り始める。久しぶりの手料理と期待しつつ、台所に立つ母にチコの事を話した。

「でもチコはやっぱり犬だね～。

アイツ、話さなくても迎えに来たよ」その事には応えず、会社での様子とか、まだ恋人はいないの等、逆に母からの質問が続いた。

やがて出てきた料理に舌鼓を打ちつつ、話が再びチコの話題になると―

「あのね、お前が悲しむから帰ってくるまで話さないでおこうと思ってたんだけど……

チコ、もういないのよ」

元々が老齢であったが、5日ほど前に容態が悪化して、その日の夜に死んだという。

リビングから外庭を見ると、主を失った小屋が彼女の目に入った。

「でも、生きている時みたいに走って何度も先回りしてたよって言ったら、“もう立てないほど衰弱してたんだけどねえ、元気になったんだね、良かったねえ”って。

もう死んでるのに、元気も何もないって」そう話す彼女は少し鼻声になっていた。今、実家には柴犬の男のコがいるそうだ。

「腹痛」

会社勤めを始めて間もない頃、
という前置きで、ある女性から
聞いた話。

まだ1人暮らしではなく、実家から職場へ
通っていた彼女は、入社してからしばらくは
仕事に慣れず、疲労困憊して帰宅する日々を
送っていた。

「慰めは、家にいたゴローでしたね」
ゴローとは実家で飼っていた犬の名前で、
あまり賢くなく、言い方は悪いがその
バカっぷりを可愛がられているような
雑種の中型犬だった。

家族全員になついていて、家に帰ると
玄関先で庭の小屋からしっぽを振って
飛び出してくる。

犬なのに運動神経も悪く、その度によく
滑って転んだりして、その仕草も彼女の
疲れを癒していた。

「勤めて半年くらいかな、変な夢を
見るようになって」

夢の中の彼女は真っ暗な世界にいて、
それだけでも不安になるところへ、
“ある者”に追いかけられる。

人の形をしてはいるが、顔も格好も
分からない。

ただ質感的に薄っぺらい印象で、
それが全力で追いかけてくるのだ。
逃げて逃げて逃げ回り、目が覚めると疲れが
全く取れていない、そんな事が1週間ほど
続くと、さすがに体調も崩れてくる。

「何かもうクタクタになっちゃって。
家族には心配かけないようにしました
けど、ふとゴローをなでていたらジッと
こちらを見つめていて。
一応犬だし、何かに気付いているのかな、
って」

しかし、その時もゴローは特に何の反応も
せず、小屋の中へ戻っていった。

「それで、その夜なんですけど……

また、あの夢を見たんです」
真っ暗な世界、そして追いかけてくる
異形のモノ—
夢の中まで体力が落ちているようで、
段々とその距離は縮まっていく。
「今まで捕まった事はないけど、
もし捕まったら—」
初めてそんな考えが頭に浮かび、
それは本能的な恐怖となって彼女の体を
突き動かす。
意志とは裏腹に、どんどん手足が重たく
なって行って—
もう少しで捕まる！ と思った瞬間、
目の前の暗闇がパカッと開いた。
「本当にこう、いきなり扉が現れて開いた
というか。
でも、その開き方が何かこう」
彼女は手の甲を上にして水平にすると、
親指以外の4本をぴたりとそろえて、
下の親指とくっつけたり離したりした。
それは、彼女の背丈ほどもある口だったと
いう。人間の口ではない事は、中にある牙が
物語っていた。
あまりの事にその場にへたり込み—
もうどうする事も出来ずにいた、次の瞬間。
「その口が、頭の上を通り越して、
そのまま後ろへ」
そして背後から、何かを噛み砕き、
引き千切る音が聞こえてきた。
同時に、“ぴい、ぴい”という人とも
獣ともつかない断末魔が—
何が起きているのかは十分に想像出来たが、
怖くて振り向く事は出来なかった。
気付いたら、そのまま朝を迎えていた。
布団の中ではなく、なぜか玄関前の廊下に
横たわっていたという。
靴置き場には、外にいるはずの
ゴローがいた。
「台風や酷い雨の日には家に入れる事も
あったから、誰かが入れたのかな、
とってたんですけど」
よく見るとゴローの様子がおかしい事に

気付いた。

どことなく元気が無く、グッタリしている。
その日は会社を休んで、動物病院へゴローを連れて行った。

「また変なもの食べちゃったのかな、
ゴロー君は」

ゴローは、拾い食いをしてお腹を壊した経験があった。

何度もゴローを診ている獣医さんは、急いでレントゲンを撮る準備を始め、ゴローを診察台へ乗せる。

しかし、出来上がった写真を見て、彼は首を傾げた。

「何だろう、これは。」

何か飲み込んだんじゃないのかな？」

白黒のレントゲン写真には、小さく角ばった黒い塊が写し出されていた。

それほど大きな物ではないので、取りあえず病院では薬で下してみる事にして、万が一容態が悪化したら、すぐに受け入れる約束をしてくれた。

彼女の心配をよそに、ゴローの体調はフンが出た途端ケロリと治った。

何を食べたのかと気になって、出てきたフンを調べてみたところ、炭のように真っ黒な木の破片みたいな物が出てきた事以外は、何もわからなかった。

結局、それはフンと一緒に捨ててしまったという。

「でも、あの日以来悪夢も見なくなりました。

やっぱりゴローが何とかしてくれたのかなって」

その後、彼女だけの頼みで、ゴローは室内犬として家の中へと入れられた。

ただ、あの日誰が玄関にゴローを入れたのかはわからず、今でも謎のままだという。

「氷水」

「二階建てのね、一階に住んでいたんだけど」

その男性は借家に住んでいた。一戸建てだが、一階と二階が分離・独立した造りになっており、お互いのプライバシーは守られていた。

「それでも生活音といますか、足音とかちょっとした大きな音とかは聞こえてましたけどね」

彼はプログラマーで、二階の人は老人。深夜帰りの多い彼は基本的に接点無く、無関心な日々を送っていた。

「でもね。タイミングってものがあるでしょう。いくら何でも生活の音がしない日が続き過ぎると……」

5日間ほど、上から全く音がしないのが気になった彼は、管理人に連絡。

結果、衰弱しきった老人が発見され、そのまま入院という流れになった。

「いくら何でも、上の階で死なれちゃ後味悪いですから。

その時は胸をなでおろしましたよ」だが、そこからがおかしかった。取り合えず警察から事情を聞かれる事になったのだが、何かいちいち引っかかる言い方をしてきたという。

「本当に誰も来なかったのか、とか。ドアの開け閉めの音はしたか、とか。1年くらい住んでましたけど、その人の知り合いは見た事無かったんで」

警察は当初しぶっていたが、事情を説明し始めた。

曰く、老人というのは抵抗力が極めて弱い。ちょっとした風邪、ケガでも死に至る。上の階の老人は神経痛か何かで動けなくなったらしいのだが、1週間ほどその状態でいたらしい。

「でも、一応布団には寝かされていたし、

何より食事はどうしていたのか、それがわからなかったみたいで」

数日後、その老人から彼に管理人つてに連絡が来た。

入院したはいいが、そのまま寝たきりになって、戻れない可能性が高いので、出来れば部屋の後始末などを頼みたい、という事だった。

そこまでの義理は無いと思いつつも、もう部屋に戻る事が無いのならばと、見舞いも兼ねて老人に話を聞きに言った。

「そこでついでというか……どうやって一週間も飲まず食わずでいられたのか聞いてみたんです」

聞くと、夢の中で食事をしていたのだと答えた。

バカげた話かも知れないが、見知らぬ、しかし以前から知っているような中年の女性が、夢の中であれこれと世話をしてくれたと。

「喉がすごく渴いてな。

するとすぐに氷水を持ってきてくれた。

冷たくてうまかったなあ……」

夢の中で食事をして、本当にしたと錯覚した事で助かったのかなあ、とあまり深くは考えず、後処理の詳細を聞いて病院を後にした。

家に帰ると、管理人の許可をもらって後片付けに入った。

とは言え、基本的にする事は中にある荷物を全て捨てる事くらいである。

「管理人は、どっちみち専門の業者に依頼する、とは言ってましたけどね。

でも一応はこちらも頼まれたので。

それほど荷物があるわけでも無いし、作業自体は楽でした」

と、一通りゴミ袋にまとめたところである物が目に入った。ネコ缶である。

しかし、ネコトイレやエサ入れが無いところを見ると—

「ここはペット禁止だったんですけど、いわゆる、“通い猫”がいたんでしょう。

もう戻ってくる事はないんだし、管理人や
大家には内緒にしておこうと思って、それ
絡みの物も全部ゴミ袋に入れました」
ふと、台所の方から風が入ってきた。
その窓、少し開いた隙間に、おそらくその
通い猫と思われる猫が立っていた。
取り合えず残っていたネコ缶でも、と
ゴミ袋を開けようとした時には、すでに
猫は消えていた。
そしてゴミ袋の口をまた閉じて、部屋を
出ようと玄関の方へ振り向いた時—
「氷水の入ったコップがあったんです」
部屋の中央、床にそれは突然出現した。
もちろん自分が用意した覚えはない。
なぜか手をつけてはいけないような気が
して、ゴミ袋をぶつけないように注意
しながら、彼は部屋を出た。
「というかね、考えてみれば引かかる
言い方とは思っていたんです。
夢の中の事を“冷たくてうまい”って
言いますかね」
ちなみに、その猫は少し太り気味の茶トラ
だったそうだ。